

巻頭言

「見つけ出すこと」

執行役員 土木本部副本部長 兼 原子力室長

鈴木 義晃

合併10周年を迎える本年、つつがなくここに「技報第10号」発刊の運びとなりました。第10号は34編を収めておりますが、毎号30編程度が掲載されており、集計してみると通算317編になります。これは10年間の合併シナジーも含めた貴重な財産であります。今回も何編かの新技術が含まれておりますが、これを活かさない手はありません。すべてが必ずしも完成された技術ではありません。担当者はさらなる技術の研磨が必要であります。出来ればその分野の第一人者となっていたきたいと期待いたします。

本年、「ヒッグス粒子」の存在を確認したというニュースがありました。難しい事はわかりませんが、物質に質量を与える粒子で、この存在がなければ宇宙の存在は無いという程度の理解をしております。137億年前にビッグバンが起こり、50億年前に太陽系ができ、46億年前に地球が誕生し、その6億年後に生命が誕生したといわれ、人類のルーツである猿人は400～300万年前であるといわれています。

40億年前に誕生した生命は、無機物の状態から発生し今日の人類へと進化しました。私見ながら、人間が思考し知識を発達させたのは、長くみても1万年前かな

と思いますが、その人間が宇宙の起源を解き明かしてしまう。当然ながら宇宙の終焉すらも予測することができるのでしょうか。一体、人間で何なのと考えざるを得ません。改めて「人間の偉大さ」を痛感しました。

「ビッグバン以前はどのようになっていたか？」子供のころの疑問でした。ビッグバン以前には時間は無いのです。物が変化するから時間概念が生まれたのです。これらの発見はつまり変化を捉まえることから導かれるものでしょう。

社会資本ストックのメンテナンスの重要性が急速に高まっています。耐久性が重要なキーワードですが、劣化は宇宙スケールでは平衡化ということかも知れません。変化を分析して、ライフを予測することも重要な技術になろうかと思います。

物理・化学の世界では発明はないといわれます。私自身もいくつかの特許発明がありますが、「発明」ではなく「発見」ではないかと感じています。

我々は本技報を読んで改良技術のヒントや新たな技術を発見をしてカイゼンしましょう。総合力を発揮して一早く完成された技術に育て上げる必要があるかと思っています。

2012年7月